

25
平成24年10月17日

学位（博士・言語教育学）申請論文 審査報告書

〈学位申請者〉 氏名 王 天予 平成24年度 満期退学

〈論文題名〉 中国人学習者による日本語慣用表現の理解に関する考察
— 身体部位詞と形容詞からなる慣用表現を対象に —

審査委員

主査 外国語学部教授 遠藤 裕子 

副査 外国語学部教授 石川 守 

副査 外国語学部准教授 平山 邦彦 

申請学位 : 博士 (言語教育学)

学位申請者 : 王 天予

論文題目 : 中国人学習者による日本語慣用表現の理解に関する考察

— 身体部位詞と形容詞からなる慣用表現を対象に —

I. 論文の主旨

本論文は、初級語彙の身体部位詞と形容詞からなる24の日本語慣用表現について、中国人日本語学習者がどのように理解するかを調査し、その調査結果を、誤答を中心に意味論と日中対照研究の立場から分析・考察したものである。

基礎語彙には多義語が多く、研究対象とした慣用表現においても全体での意味拡張や構成要素の意味拡張が見られる。比喻形式等の認知的基盤は共通であっても、未習の慣用表現の意味を推測するのは容易ではない。本研究では、日本人中学生にも同様の調査を行い、中国人日本語学習者の母語の影響を検証した。

誤答の要因としては、中国語での類似する慣用表現の存在、両言語における形容詞の意味のずれ、などが主たるものと認められた。言語的要因に加え、一部の慣用表現については文化的要因も認められた。

II. 論文の構成

本論文の構成は、次の通りである。

目次

第1章	はじめに	5
1.1	研究目的	5
1.2	研究内容と方法	5
1.3	本論文の構成	7
第2章	先行研究	8
2.1	慣用的表現の分類と基準に関する研究	8
2.1.1	宮地裕 (1982、1985) における「連語成句的慣用句」と「隠喩的慣用句」	
2.1.2	国広哲弥 (1985) における「連語」と「慣用句」	
2.1.3	初山洋介 (1997) における比喻に注目した研究	
2.1.4	石田プリシラ (1999、2004) における統語的固定性と意味的固定性	
2.1.5	本研究における「慣用表現」	
2.2	身体部位詞を含む慣用表現に関する研究	15
2.2.1	有菌智美 (2005、2006、2007、2008) における意味的分解可能性による慣用表現の分類	
2.2.2	田中聡子 (2002、2003) における身体の文化モデル	
2.2.3	石田プリシラ (1999、2004)	

2.3 慣用表現の対照研究	19
2.3.1 他言語における慣用表現の対照研究	
2.3.2 慣用表現の習得研究	
2.3.3 日本語の慣用表現と中国語の「慣用語」との対応関係に関する研究	
2.3.4 慣用表現の中日対照研究	
2.3.5 中国人研究者による対照研究の傾向と問題点	
第3章 身体部位詞の意味と慣用表現の意味用法	26
3.1 身体部位詞の意味	26
3.1.1 「頭」の意味	
3.1.2 「顔」の意味	
3.1.3 「目」の意味	
3.1.4 「鼻」の意味	
3.1.5 「口」の意味	
3.1.6 「耳」の意味	
3.1.7 「手」の意味	
3.1.8 「足」の意味	
3.1.9 「腰」の意味	
3.1.10 「腹」の意味	
3.1.11 「尻」の意味	
3.1.12 日本語と中国語における身体部位詞の漢字表記の対照	
3.2 慣用表現の意味用法	38
3.2.1 「頭が固（かた）い」の意味用法	
3.2.2 「顔が広（ひろ）い」の意味用法	
3.2.3 「目が高い」の意味用法	
3.2.4 「目がない」の意味用法	
3.2.5 「目の黒いうち」の意味用法	
3.2.6 「鼻が高い」の意味用法	
3.2.7 「鼻の下が長い」の意味用法	
3.2.8 「耳がとおい」の意味用法	
3.2.9 「耳がはやい」の意味用法	
3.2.10 「口がうまい」の意味用法	
3.2.11 「口が多い」の意味用法	
3.2.12 「口が重（おも）い」の意味用法	
3.2.13 「口が軽（かる）い」の意味用法	
3.2.14 「口が堅（かた）い」の意味用法	
3.2.15 「口がさびしい」の意味用法	
3.2.16 「口がわるい」の意味用法	

3.2.17	「手がはやい」の意味用法	
3.2.18	「足がはやい」の意味用法	
3.2.19	「腰が強（つよ）い」の意味用法	
3.2.20	「腰が低（ひく）い」の意味用法	
3.2.21	「腹がふとい」の意味用法	
3.2.22	「尻がかるい」の意味用法	
3.2.23	「尻がながい」の意味用法	
3.2.24	「尻があおい」の意味用法	
第4章	調査	58
4.1	調査の目的	58
4.2	調査対象	58
4.2.1	中国人日本語学習者	
4.2.2	日本語母語話者	
4.3	調査票	59
4.4	予備調査	59
4.5	本調査	60
4.5.1	調査実施の流れ	
4.5.2	集計方法	
4.6	調査結果	64
第5章	調査結果の分析	67
5.1	中国語に同型表現がある項目の結果分析	69
5.1.1	「口がおもい」	
5.1.2	「口がかたい」	
5.1.3	「口がかるい」	
5.1.4	「手がはやい」	
5.1.5	「足がはやい」	
5.2	中国語に類似表現がある項目の結果分析	82
5.2.1	「顔がひろい」	
5.2.2	「口がわるい」	
5.2.3	「目が高い」	
5.2.4	「鼻が高い」	
5.2.5	「腹がふとい」	
5.3	中国語に同型または類似表現がない項目の結果分析	96
5.3.1	「頭がかたい」	
5.3.2	「口がさびしい」	
5.3.3	「耳がとおい」	
5.3.4	「耳がはやい」	

5.3.5 「腰がつよい」	
5.3.6 「腰がひくい」	
5.3.7 「尻がながい」	
5.3.8 「尻があおい」	
5.4 分析のまとめ	112
第6章 考察と今後の課題	114
6.1 日本語慣用表現における意味成立の分析結果	114
6.2 調査結果の考察と結論	117
6.3 今後の課題	124
註	125
参考文献	128
付録1 調査票（予備調査用）	134
付録2 調査票（本調査用）	137
謝辞	

Ⅲ. 論文の概要

第1章 はじめに

第1章では、研究の背景、目的、研究内容と方法について述べている。

中国の大学で使用される初級教材には、慣用表現の導入が概して少なく、また、中国人日本語学習者には、当該の句が慣用表現なのか単なる句なのか判断できないことなどから、慣用表現は習得の難しい項目の一つと考えられているという。本論文では、初級語彙である11の身体部位詞と16の形容詞からなる24の慣用表現を取り上げ、実際の意味用法を、先行研究と均衡コーパスおよびインターネットでの使用例を利用して分析・記述し、その上で、学習者の理解度調査を実施し、結果を意味論の立場から分析・考察すると述べている。

第2章 先行研究

第2章では、先行研究を大きく3つの分野に分けて解説するとともに問題点について論じている。

「慣用的表現の分類と基準に関する研究」では、まず分類基準と用語の問題を取り上げ、諸研究において「慣用的表現、慣用表現、慣用句、イディオム、定型表現」など複数の用語が使用されており、慣用表現の範囲も基準もさまざまであることを示している。一方、分析対象としては、動詞慣用句、形容詞慣用句、その他の慣用句などがあり、分析のアプローチとしては主として意味論の立場からのものと統語論の立場からのものに分けられるとしている。統語的操作で固定性をはかる研究は、動詞慣用句に関して行われているという。全体としては意味に関する研究が多く、慣用表現の全体の意味と構成要素の意味との

関係、ないしは慣用表現としての意味と文字通りの意味との関係に注目したものや、認知意味論の立場から意味拡張に注目したものなどが見られるとまとめている。

「身体部位詞を含む慣用表現に関する研究」では、本研究の対象語を中心にまとめている。「手、口、顔、頭、腹、胸」などの身体部位詞は拡張義が多いことで知られているが、これらの語に関して、意味論、文化背景、統語論などの立場での研究がなされてきており、特に、比喩形式に注目した研究が多いことを述べている。

「慣用表現の対照研究」では、日本語と各国語との対照研究を紹介し、さらに慣用表現の習得研究がほとんど進んでいない現状について述べている。また、中国語における「慣用語」と日本語の慣用表現との対応関係についてまとめ、中国人研究者による対照研究は、動詞慣用句が多いこと、また身体部位詞を含む慣用表現の研究では、身体部位詞と結びつく方の語の分析があまりなされていないことなどを指摘している。

第3章 身体部位詞の意味と慣用表現の意味用法

第3章では、身体部位詞が指す身体部分と主要な拡張義を中心に分析・記述し、慣用表現全体についてはコーパスなどを利用して現代語としての使用を重視して記述している。11の身体部位詞のうち「頭、顔、目、口、腹、鼻、耳、尻」については、中国語での簡体字使用や「通称」使用のため、日中両語で使う漢字が異なるが、指す身体部位は一致していることなどを指摘している。「腰」は、日中両語で漢字表記も指す身体部位も一致している。「手」は、中国語では手首から指先までの部分を指し、腕を指す場合は別の語を使用するとし、「足」は、中国語の現代語では単独では使わず、また「手」と同じように二つの語（漢字）が対応するとまとめている。

慣用表現の意味用法については、実際の使用例を調査することで、慣用句辞典では見過ごされがちな用法も拾い記述している。「口が悪い、手が早い、足がはやい、腰が強い」など、複数の意味用法を持つ慣用表現について、意味用法ごとに構成要素と全体の意味の関係を明らかにし、記述している。

第4章 調査

第4章では、調査の方法と内容について述べている。

調査は多肢選択法の質問紙調査であり、調査対象は、中国人日本語学習者については、中国東北部にある大学の日本語学部2年生230名、また、比較対照する日本語母語話者については、東京都内の公立中学1年生と2年生合わせて213名であること、予備調査を経て、2010年に本調査を実施し、有効回答数は、学習者216名、母語話者206名であったことなどを述べている。母語話者を中学生とした理由は、慣用表現の知識がまだ少なく、未知の表現に対して推測で回答することが予想されるからとしている。複数回答を認めたため、集計は各選択肢の回答と、各回答者の回答の両方を利用するという。

第5章 調査結果の分析

第5章の概要は、次の通りである。

「中国語に同型表現がある項目」は、「口が重い、口が軽い、口がかたい、手がはやい、足がはやい」であり、全体としては、中国語の同型表現の意味ではなく日本語としての意味を推測する傾向が見られるとまとめている。全体で拡張した慣用表現に対して、構成要素に分解して理解したことがうかがわれるとし、その場合、形容詞の理解において中国語の影響が強いことを意味論的に説明している。さらに、複数の意味をもつ表現に関しては、抽象度の高い意味、あるいは言語外の要素が含まれる意味を推測するのは困難なことが示されたとしている。

「中国語に類似表現がある項目」は、「顔がひろい、口がわるい、目が高い、鼻が高い、腹がふとい」であり、全体としては、中国語にある類似表現の意味に影響される傾向が見られたとまとめている。また、意味的に分解可能と考えた表現には構成要素を類似語で置き換え、分解不能と考えた表現には全体で類似する中国語表現で日本語慣用表現の意味を推測した可能性を指摘している。

「中国語に同型表現や類似表現がない項目」は、「頭がかたい、口がさびしい、耳がとおい、耳がはやい、腰がつよい、腰がひくい、尻がながい、尻があおい」であり、全体としては慣用表現を分解して理解する傾向が見られたとまとめている。この場合、形容詞の意味が両言語間でずれていることが誤答の要因になることを明らかにした。また、学習者と母語話者とで回答傾向の似た項目と、回答傾向の異なる項目があったことを指摘している。

第6章 考察と今後の課題

第6章では、まず日本語慣用表現の意味成立について考察している。「構成要素の拡張義の和」「慣用表現全体で拡張」、その中間のタイプの「構成要素の拡張義の和に、別の意が加わる」の三分類を提案し、学習者の調査結果についても同様の分類法で回答の意味成立の分析を対照している。その結果、全体の傾向としては日本語本来の意味成立とほぼ一致するが、一部の慣用表現については中国語の影響を受けたことが示唆されたとしている。

同型表現と類似表現との関連については、結論を次のようにまとめている。

i. 中国語に同型表現がある日本語慣用表現の場合、中国人日本語学習者は全体としての意味を意識して母語と異なる意味に推測する傾向がある。構成要素、特に形容詞に対する理解において母語の影響を受け、全体の意味を取り違えと考えられる。

ii. 中国語に類似表現がある日本語慣用表現の場合、中国人日本語学習者は中国語の類似表現の意味に依存する傾向が見られる。

iii. 中国語に同型または類似表現がない日本語慣用表現の場合、日本人と似た傾向が見られたものもあるが、形容詞の意味が日本語とずれている慣用表現では、日本語母語話者と異なる回答が見られた。

iv. 文化などの非言語的要素が意味に含まれる慣用表現では、中国人日本語学習者は意味の推測が困難と見られる。

IV. 論文の総合評価

1. 論文提出までの経緯

学位申請者は、2008年4月本学言語教育研究科博士後期課程言語教育学専攻に入学した。修了に必要な10単位を取得し、外国語（日本語）検定試験にも合格して、2013年3月に博士論文を提出の上、満期退学している。

本論文は、言語教育研究科博士論文規定A日程により進められている。2010年7月1日に学位論文提出願いが出され、2010年7月23日、言語教育研究科委員会で承認されている。論文提出時の業績は、博士論文中間発表会、『拓殖大学言語教育研究年報』、及び学外の学会・学会誌での発表を含め、6本である。完成論文発表会は、2013年1月12日に実施され、2013年1月26日の言語教育研究科委員会で論文の受理が承認されている。論文は2013年3月28日に提出、受理されている。

審査委員による論文審査委員会を2013年7月26日に開催し、審査の結果は全員一致で合格であった。最終試験（口述試験）を2013年10月17日に実施し、審議の結果全員一致で「合格」と判定した。

2. 審査所見

本論文は、身体部位詞と形容詞からなる慣用表現について中国人学習者の理解度調査を実施し、意味論と日中対照研究の立場から誤答を中心に分析・考察したものである。結論としてまとめられた4点だけでなく、個々の調査結果にも発展的研究につながるデータが多く、理論面のみならず資料的にも高い価値があると認められる。

以下、「審査基準」を中心に具体的に述べていく。

(1) 研究テーマに関して

初級語彙の形容詞と身体部位詞からなる慣用表現の研究はこれまであまり取り上げられてこなかった分野であり、さらにこの慣用表現の理解を中国在住の学習者を対象に調査するというテーマは独創性と発展性のあるものである。着眼点の良さが高く評価できる。

(2) 先行研究の把握に関して

先行研究に関しては、本研究の基盤となる慣用表現の基準や分類に関する研究から、具体的な個別の研究まで、丁寧に収集し把握していると認められる。また、メタファーによる意味拡張など認知言語学の理論に関しては、王（2009）執筆に際しても取り組んでおり、日本語慣用表現の分析と誤答の分析において、その知見が十分生かされている。

(3) 研究方法に関して

まず、日本語慣用表現の意味用法を、実例をもとにまとめ、さらに意味成立を個別に説明するという着実な方法が評価できる。また、誤答を中心とした調査結果の分析において、身体部位詞・形容詞・慣用表現全体の意味拡張を母語である中国語と単純に対照するのではなく、中国語における同型または類似表現の存在という別の要素を含め複数のレベルで行ったことは、新しいアプローチであり大いに評価できる。

調査に関しては、中国での調査・日本での調査とも、量的に十分で質的にも信頼性が高く、大変貴重な資料となっている。調査結果とその分析は、意味論と日本語教育の双方に貢献するものと思われる。

一方、学習者の日本語レベルを考慮した結果、調査票の選択肢の日本語表現に言い尽くされていないものが見られること、フォローアップ・インタビューの数が少ないことがやや不十分な点として挙げられるが、調査結果に直接影響を及ぼすものではないと認められる。

(4) 論旨に関して

慣用表現本来の意味成立と誤答の意味成立との対照、中国人日本語学習者と日本語母語話者との対照について明快に分析・記述されており、論旨も一貫している。

中国語における同型ないし類似表現との関連から全体の傾向をまとめた内容も、妥当であると認められる。

この他、学習者の誤答が多くかつ母語話者との差が大きい慣用表現、学習者と母語話者ともに正答の少ない慣用表現などについても指摘したことは、今後の意味論および誤用分析につながる成果であると評価できる。

(5) 構成、言語表現に関して

論文構成は、全体として妥当であり、言語表現にも問題はない。また、調査結果の分析は、表とグラフを併用して記述されており、全体の結果、グループごとの結果、個々の項目の結果が、一読して分かるよう配慮されている。

以上に示されるように、本研究は、研究テーマ、先行研究、調査、研究方法のいずれにおいても適切・妥当なものであり、特に中国・日本それぞれ二百余名を対象に実施した調査は特筆される。また、論文構成、言語表現、体裁などについても、問題はない。本論文は、研究内容に独創性を有するものであり、当該分野の研究に幾ばくかの貢献をなすものと認められる。

学位申請者は、将来、言語教育の専門家として高等教育機関で活躍していく能力と学識を持つものと認められる。

以上により、本審査委員会は、慎重・厳正な審査の結果、総合的に判断して、三委員全員が一致して学位申請者に対し、「博士（言語教育学）」の学位を授与するに値するものと認めた。

以上